

第3章　まとめ　—房総の牧と御料牧場遺跡—

房総の牧

下総国の中南部には、広大な台地が広がり水の便は決して良い地とはいえない。野馬牧場もこの広大な荒地を利用し、古くは延喜式の中に下総牧の所在を伝える文面があり、高津、大結といった地名をうかがうことができる。ただ、本格的に整備されたのは江戸時代に入ってからで、幕府は当地に小金、佐倉牧を開設している。また、安房地方では戦国時代に里見氏が軍馬養成のため牧を設けたと伝えられ、一担断絶したものの、享保年間に江戸幕府が再度嶺岡牧を開設し積極的に牧経営に乗り出している。

小金牧は、高田台牧(柏市高田、松ヶ崎、花野井、十余二、流山市駒木、野田付近)、上野牧(柏市街付近)、中野牧(松戸市五香、六実、鎌ヶ谷付近)、下野牧(習志野原付近)、印西牧(印西町十余一付近)の5牧からなり、一方佐倉牧は、内野牧(富里町七栄、新木戸付近)、高野牧(富里町高野、新井田新田付近)、柳沢牧(八街町市街付近)、取香牧(成田市取香、三里塚、芝山町岩山付近)、小間子牧(八街町四木開墾付近)、矢作牧(多古町十余三、久賀付近)、油田牧(栗源町岩部、上野台付近)の7牧からなっている。嶺岡牧は、西一牧、西二牧、東上牧、東下牧、柱木牧の5牧である。



第29図 小金、佐倉両牧位置図

江戸時代の牧

1. 牧の管理、運営

江戸時代初期慶長年間に幕府は下総に小金、佐倉の両牧を開設しており、初代野馬奉行綿貫夏右衛門が家康に召されて以来、代々綿貫氏が野馬奉行を世襲し牧の管理にあたることとなる。

小金牧は、当初より綿貫氏が幕府の命で管理にあたるが、江戸時代中期享保年間に南部（中野牧、下野牧）と北部（上野牧、高田台牧、印西牧）に分割し、南部を関東郡代の管轄とし金ヶ作に陣屋を設け、北部は従来通り綿貫氏の管理するところとなった。また、佐倉牧は内野牧、柳沢牧、高野牧の3牧が佐倉城主のもとにおかれ、城主方あるいは三牧方と呼ばれ、小間子牧、取香牧、矢作牧、油田牧の4牧は綿貫氏があずかり、小金方あるいは四牧方と呼ばれた。

牧管理の構成は、佐倉四牧を例にとると、江戸野馬役所の支配下に小金の綿貫夏右衛門以下、牧士7名、牧士並4～5名、牧士見習（牧士の血縁者で将来牧士を継ぐ者）4～5名、馬医1名、勢子廻4名、網掛2名、捕手13名で構成され、幕府から俸禄を受けていた。また、野付村と称する周辺の農村209ヶ村の農民も手伝いに当たっている。

牧経営の一大行事は野馬の捕獲であるが、小金牧では春、佐倉牧では秋（旧暦7～8月）に行なわれるのが通例で約40日前後の日数をかけている。また、嶺岡牧では3月下旬から4月にかけて行なわれている。佐倉牧では野付村から数百人の勢子人足がかり出され、牧士や勢子廻の指揮のもとで3m程の竹竿や棒をもち、闘の声をあげながら広大な牧から捕込へと野馬を追い込んでいく。込場では頭数、種別を調べ、野返しする馬、江戸の野馬役所や佐倉城主に供する馬、払い下げる馬などを選別した。また、捕馬の際には各牧の焼印が捺された（第30図）。

小 金 五 牧 野 馬 烧 印						
上 野 牧	高 田 台 牧	印 西 牧	中 野 牧	下 野 牧		
笠	琴 柱	瓢 簾	千 鳥	輪 違		
佐 倉 七 牧 野 馬 烧 印						
小 間 古 牧	取 香 牧	矢 作 牧	油 田 牧	内 野 牧	高 野 牧	柳 沢 牧
分 銅	扇 地 紙	矢 羽	三 日 月	亀 甲	蕨	団 扇

第30図 小金・佐倉牧野馬焼印図

小金、佐倉両牧の野馬数の正確な数字は明らかでないが、1,700年頃で1,119頭、幕末で小金牧が1,300頭、佐倉牧で3,800頭程といわれる。江戸時代後期の佐倉四牧では下表のように千数百頭の残馬数の記録がある。おそらく佐倉7牧で3,000頭前後の野馬がいたものと推測される。このうち毎年200頭前後が払い下げられたものと考えられる。

四牧方別残馬数

	牧名	父馬	母馬	式才駒	当才駒	当才駄	計
寛政十二年 1800年	小間子牧	疋29	疋455	疋47	疋89	疋86	疋706
	取香牧	21	279	41	61	53	455
	矢作牧	21	302	35	80	56	494
	油田牧	8	109	12	14	23	166
	計	79	1,145	135	244	218	1,821
文化二年 1805年	小間子牧	27	455	19	96	88	685
	取香牧	21	247	17	39	52	376
	矢作牧	20	277	26	39	48	410
	油田牧	8	81	3	13	7	112
	計	76	1,060	65	187	195	1,583
天保十年 1839年	小間子牧	30	287	30	51	52	450
	取香牧	19	175	13	32	31	270
	矢作牧	21	210	15	46	39	331
	油田牧	10	99	7	20	12	148
	計	80	771	65	149	134	1,199
文久三年 1863年	小間子牧	30	283	24	62	70	469
	取香牧	19	157	12	39	36	263
	矢作牧	21	233	17	43	43	357
	油田牧	10	75	6	10	13	114
	計	80	748	59	154	162	1,203

2. 牧と農民

牧の管理、運営において、農民はしばしばかり出されている。野馬の捕獲にあたっては、野付村より数百人に及ぶ農民が勢子人足として40余日もの期間微発され、さらに土手の修理、修復を行なう土手普請、井戸を掘ったり雨水の溜を設ける呑井、その他野火防、植林、伐採、牧場見廻り、犬防など隨時労働力としてかり出された。

以下、牧の年中行事で農民が労働力を提供したものあげると、

土手普請

外囲いの土手、内を区切る勢子土手、捕込場の土手等の崩れた箇所を、毎年冬から春にかけての農閑期に野付村の人足を動員して修復、新設した。これには賃金が支払われる。

夏見廻り

江戸の野馬役人が野馬の生育状況の観察、野付村々からの請願の実地見分、土手普請の調査、払い下げの木の確認、植林場所の適否等々牧場管理の全般に対する見分、監査で、7牧で10日間程行なわれた。2～3人の牧士が案内につき、雑用の人足、馬などが野付村から差し出された。

犬防（犬防ぎ）

春、野馬の出産にとって、山犬、狼が最大の敵となる。そこで、鉄砲で射殺したり犬落し穴をつくって捕えた。犬落し穴は野付村から人足を出し、1牧に数箇所の竹や木を使用して穴をつくついる。1つの穴で平均3頭の犬が捕えられている。

植林

野馬の寒暑しのぎのため、松、櫛等を植えている。幕府の財政援助の施策であるともいわれる。各牧に1万本程植えられたようだ。

伐採

松、杉、雑木等は野馬の寒暑しのぎの役割をはたしていたが、繁茂しすぎると野馬の成育や捕馬の妨げとなるため適当に切り透しをする必要があった。また、伐採された木々は野付村に優先的に払い下げられている。

野火防（野火止め）

山火事が広範囲に広がるのを防ぐため、事前に雑木や灌木を一定幅伐り払って焼却した。この作業は各牧ごとに人足を集めて行なった。

牧場見廻り（野先見廻り）

野付村では自村に近い一定区域を毎日1回見廻り、野馬の生育状態を観察し、変わったことがあると担当牧士に報告した。怠るようなことがあると名主、組頭が呼び出されることもあった。

追勢子人足

野馬捕獲の際、野付村々からその村の石高に合わせた割り当てで人足を出した。

代替諸役

野馬捕獲の際、追勢子人足の替りに、入草村、水夫賄村、御払場の雑用村、江戸役人、牧士の使役村など、追勢子人足割りで振り替えられた。

これらの作業にかり出される農民の負担は相当なものであったようだが、反面、農民にプラスになっていることも少なくないようで、慶応4年（1868年）9月、綿貫夏右衛門支配小金牧士惣代の香取貞三郎、白石邦造が御馬方役所に提出した「嘆願書」によると、『小金、佐倉両牧は住古より連綿と野馬を立ておかれた。そのため私どもは慶長、元和の度に召しだされ牧士役を仰せつかった。すなわち御扶持御絵馬をくだされ綿貫夏右衛門支配となり、野馬の飼養取扱

方を命ぜられ水草など差し支えないよう野廻りをおこない、馬出生の折は狼、山犬が野馬にからぬよう昼夜油断なく防止にあたった。その結果馬数も追々に増加し、年々三歳以上の駒は直下で年賦御払の措置をとることになった。右の払馬は元来寒暑風雪をしのぎ成育したので、草飼のみでもけっこう体力を持続できる。諸国出産の里馬とは違い小丈ではあるが、飼料の負担も少なく20ヶ年は活動できる。昔は百姓の持馬はまれであったが、値段も安いので追々希望者がふえ、田畠のこやしも自然とできるので、百姓もよろこんでいる。ここ10年来、御払値段は高下はあるが、年々御払代金は数千両におよんでいる状況である。かつ、関係村の農民は牧の株枯芝あるいは自生の薬草、栗の実の採取もでき、なにかと衣食の足しになっている。また、御用地内の成木は地元村々へ払い下げとなるので農間の稼ぎともなる。小金牧には野馬のほか、数町歩の御林があり、年々御極印の上1,000本を真木に伐るのでこれの駄賃稼ぎも農民のくらしの足しとなっている。』とあり、牧の周辺に植えた松、杉、櫛を利用し、佐倉炭の生産が行なわれていた。当地で多く見られる炭ガマは、この佐倉炭生産との関連が深いと思われる。さらに普請、捕馬の人足などには日当も支払われており、数少ない現金収入の道も開かれている。また、野馬の払い下げの多くは近隣農民で、3~7か年の年賦支払いが常であり中には10~20年のものも見られることから、かなり農民には有利であったようだ。

明治以降の牧

1. 新田開発と牧の統合

明治政府は江戸時代幕府の直轄であった小金、佐倉両牧の広大な土地の開発に着目し、その開墾に着手していく。それは殖産興業の重要な施策の一環であったが、実際は維新の政変による失業者、ことに東京府下の無産窮民の救済がさせた課題であったためのようである。

しかし、当時の新政府は財政難に苦しんでいたため直接事業を遂行する財力は無く、そこで東京の豪商等に呼びかけて下総開墾会社を組織させ、土地を譲渡する代償として入植者の世話をするという方法をとった。こうして、明治2年公募した移住民志願者約6,000人とともに小金5牧と佐倉5牧（取香、小間子両牧は政府直轄）の開墾を開始している。開墾地には地名がなかつたため、開墾順に従がい名称が付されていく。すなわち、

初富	（中野牧）	七栄	（内野牧）	十余一	（印西牧）
二和・三咲	（下野牧）	八街	（柳沢牧）	十余二	（高田台牧）
豊四季	（上野牧）	九美上	（油田牧）	十余三	（矢作牧）
五香・六実	（中野牧）	十倉	（高野牧）		

以上、13までの開墾地である。開墾はかなり急ピッチに進められたが、自然環境、生活環境ともきびしく、生活の不便さは移住民の定着意欲を低下させ、土地を離れる者も少なくなかった。さらに、会社の経営も不振に陥り、明治5年に早くも解散している。しかし、移住民にはそれ

ぞれ5反5畝(5,500m²)の土地が与えられたので独立農夫として以降細々と開墾を進めていくこととなる。

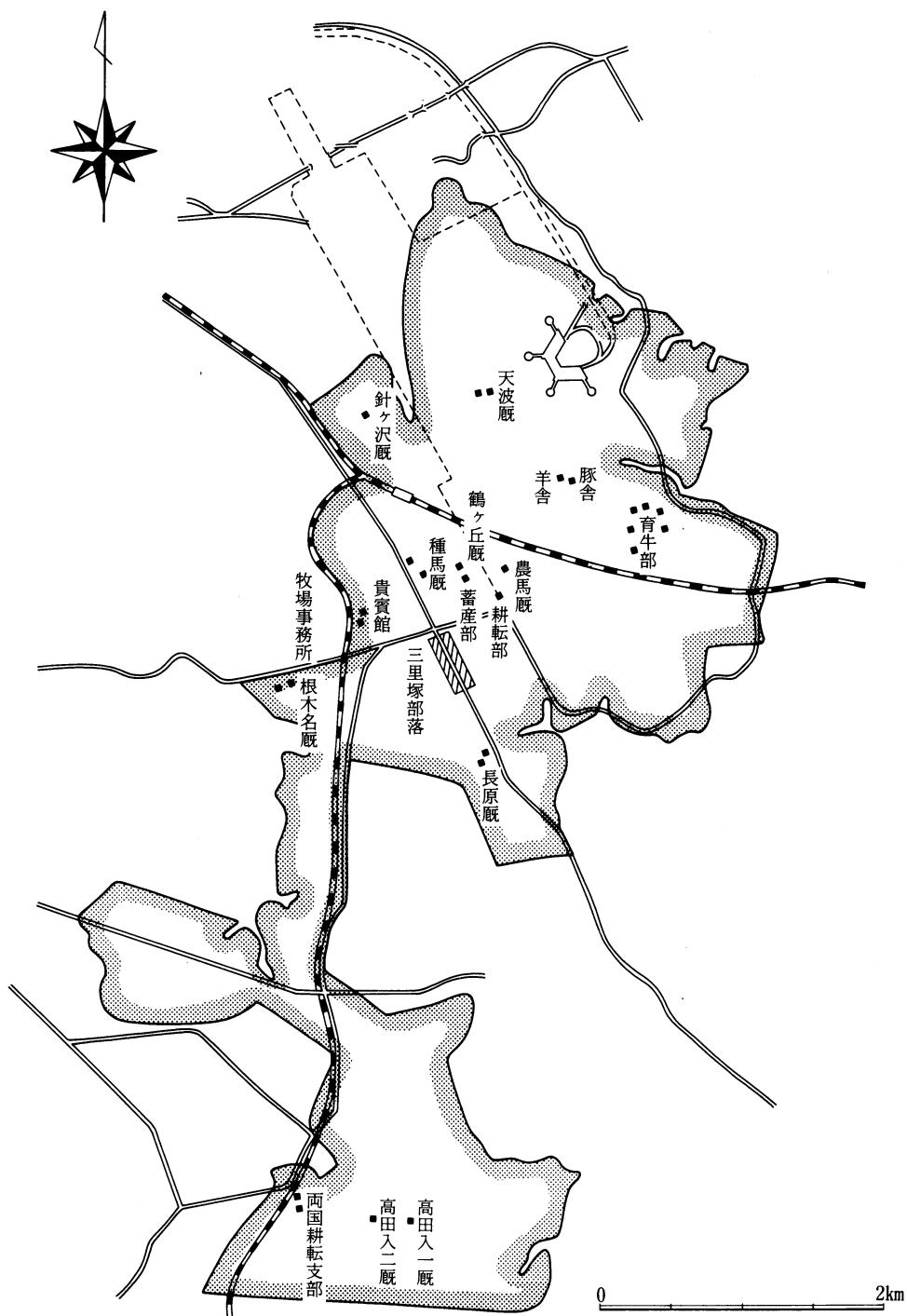
さて、小金、佐倉両牧は先述のとおり大部分は廃止され開墾地となり、牧経営を継続していくのは取香牧と小間子牧の2か所となるが、主力は取香牧であったようで、放牧の野馬はすべて取香牧に集められている。おそらく2,000頭程であったと推測される。しかし、明治5年には馬疫が流行し、相当数の馬が死亡あるいは売却され、わずか212頭の保有に激減し、牧は衰えていった。しかし、この頃から国内でも原料羊毛を確保して毛織物業を興こし、輸入を減らそうとする政策が進められ、取香牧周辺に牧羊場の開設が決定されていく。また、牧羊事業とともに牛馬の改良も急務であることから、取香牧は種畜場に変更、牧羊用地として十倉(高野牧)七栄(内野牧)、十余三(矢作牧)の土地が選定され、明治8年に取香種畜場と下総羊牧場が開設された。その後、明治13年には両者が合併し下総種畜場に、明治21年には宮内省下総御料牧場と改称し、事務所を三里塚に置いた。このように、江戸時代に盛隆した房総の牧は、明治期に入り成田市三里塚の御料牧場へと収束していったのである。

2. 御料牧場

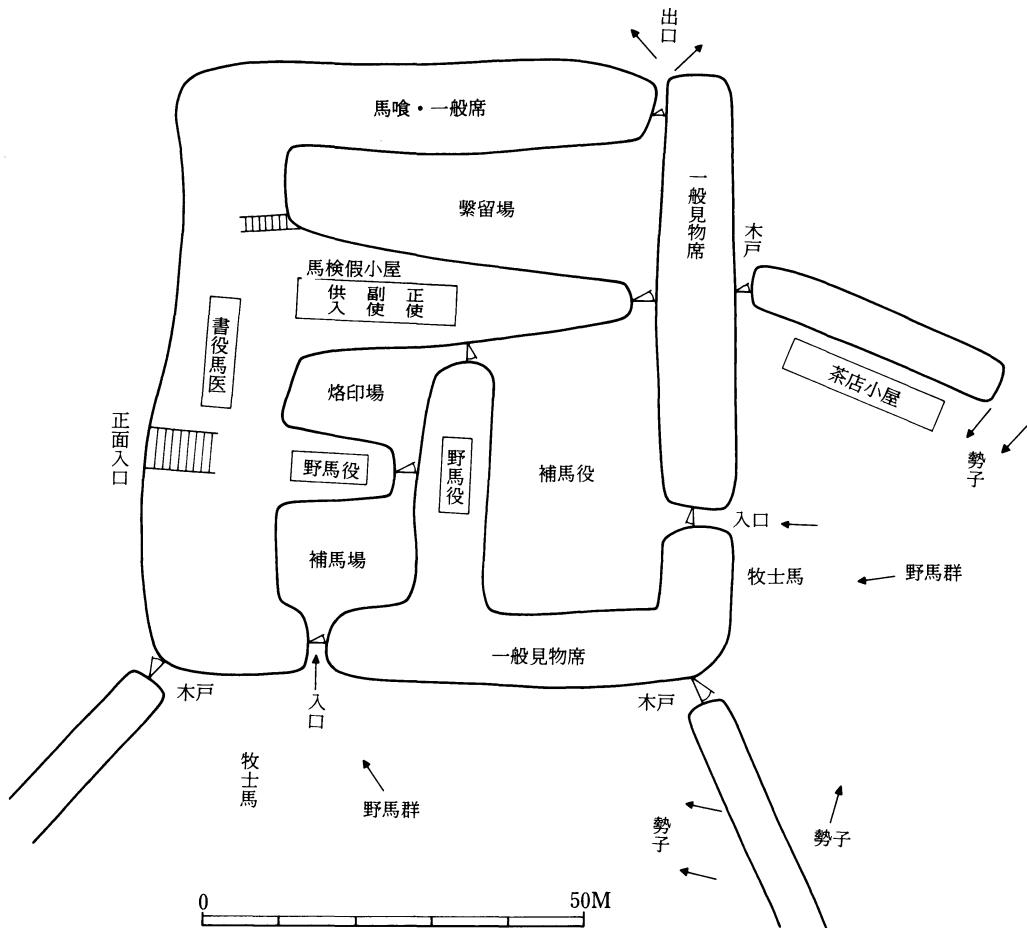
前項でも述べたが、明治8年小金、佐倉両牧は統合、縮小して取香種畜場と下総羊牧場が設置され、日本の家畜改良の基地として再出発する。現在の三里塚地区や大清水地区には部落が形成され、事務所、官舎、牧夫舎、畜舎の建設をはじめ、土手や柵の設置、道路建設等の事業が開始された。その後、下総種畜場、宮内省下総種畜場、下総御料牧場、宮内省下総牧場、下総御料牧場と名称を変えていくものの、主に馬、牛、羊等家畜の放牧、品種改良を行なってきた。また、農耕用の大型機械の導入も全国に先がけて実施し、さらに、昭和期には競走馬の輸入を機にサラブレッドの育成にも多大な努力をはらい、昭和2年輸入したトランヌソル号は種牡馬として産駒374頭を有し、クモハタ号をはじめとするダービー馬6頭を世に送り出している。また、昭和10年輸入のダイオライト号は産駒272頭でセントライト号(日本初の三冠馬)を生んでいる。また、獣医学の学生の実地教育の場としても利用されており、日本の牧畜、家畜農業に与えた影響は多大なものであった。なお、この御料牧場も昭和44年、新東京国際空港の建設とともにその幕を閉じていく。

御料牧場遺跡の役割

本遺跡外周の土手は台形を呈すが、当初より土手に囲まれていたとは考えにくい。北辺の土手は高さ、幅とも大規模で他辺の土手とは異なり、県道成田～松尾線を越えて東方に延びている。さらにその延長線上には取香捕込跡(古込)が所在し、また南方には五十石込跡がひえていることから、江戸時代取香牧の主要な土手であった可能性が強い。この土手は取香牧内部を通過することから牧内部を区画する勢子土手と思われる。



第31図 昭和9年下総牧場建物配置図



第32図 取香牧「捕込」復原図（「三里塚」より）

取香牧には4か所の捕込場が設けられているが、そのうち古込は昭和46年に調査されその全容が明らかになった。ここで、捕込跡の1例として古込について触れると、南北80m、東西70mとほぼ方形に土塁がめぐり、内部を4房に区画している。南西コーナー、南東コーナー、東辺に向かって三方から勢子土手が集まり、勢子土手先端と捕込本体との間は幅3m程の木戸が設けられている。牧内の勢子土手の間隔は序々に狭められ野馬は捕込場に追い込まれていくが、この捕込では2方向から追い込んだ野馬が捕馬場に入り焰印場へと送られる。最後は繫留場で馬の見分けがなされる。捕込の土塁上には馬見役、馬肝煎、御馬預、牧使正使、副使等が要所にひかえ、周囲には一般席が設けられ屋台なども出店しておおいにぎわったようだ。このように捕込場では、頭数、種別を記録し、献上の馬、払い下げの馬、野返しの馬などに区分けしている。

牧内の捕込からは四方に勢子土手が延びていくが、その1条が遺跡外周北辺の土手と考えら

れる。

明治期になると、日本の牧場の草わけ的存在であった御料牧場の一角、本遺跡の所在する長原地区には、明治11年、官舎、病畜舎が新築され、周囲には土手を築いたといわれる。したがって、外周部と内部を区画する土手はこの時に築かれたものと思われる。ここでは主に牧場内における衛生に関する一切の業務を行なうとともに、重症の家畜を病畜舎に入れ治療に当たっている。また、明治13年以降は獣医学を広く全国に普及するため、駒場農学校（現東京大学農学部）の獣医科の学生の実地治療の研究や家畜の飼養管理、農作業の実習地となり、当時牛や綿羊の伝染病に備えて隔離畜舎等も建てられている。この実習は第二次世界大戦前まで続けられ、本遺跡が所在する長原地区が学生の実地教育に果たした功績はたいへん大きかったといえる。しかし、ここも昭和44年、新東京国際空港の建設に伴い幕を閉じていく。

参考文献

「下総御料牧場史」 宮内庁 昭49

「成田市史」近現代編 成田市史編纂委員会 昭61

「酒々井町史」通史編上巻 酒々井町史編纂委員会 昭62

「千葉県の歴史」小笠原長和・川村優 昭46

「房総の牧」第3号 房総の牧研究会 昭60

郷土史講座講義録（第13回）下総牧とその開発 船橋市郷土資料館 昭55

郷土史講座講義録（第14回）佐倉牧とその周辺の開発 船橋市郷土資料館 昭56

「三里塚」（財）千葉県北総公社 昭46